

18 法相五重唯識観について

〈4コマ〉

まつく ぼしゅういん
松久保 秀胤

薬師寺長老
公益財団法人中村元東方
研究所 理事



[日 時] 5月26日(土) 13:30~15:00, 15:20~16:50
6月23日(土) 13:30~15:00, 15:20~16:50

[テキスト] 適宜

[受講料] 5,800円

(早割 4,800円 ※5月19日までに受講料を納入された場合)

唯識教学は日本仏教の基本教学である。従って佛教大学では基礎学科として教科カリキュラムに編成されている。

唯識教学は「阿含経」に端緒を発し、釈尊滅後九百年にして無著（アッサンガ）大士が弥勒菩薩に請願して「解深密経・法相品」に相当する経典を請受し、舎弟世親大士（ヴァスバンドゥ）が翻経して「唯識三十頌」を製頌したと伝承している。

唯識教学は六経十一部論の教相を含んでいる。すなわち華嚴経、阿毘達磨経、^{にゅうりょうがきょう}入楞伽経等及び瑜伽論、撰大乘論、観所縁々論、二十唯識論、弁中辺論、十地論、莊嚴大乘論、顕揚聖教論、等十一部の註釈論書をもって「成唯識論」十巻本としている。これらの論書を註釈に従事した論師を十大論師と称するが、護法論師の註釈を正依釈としている。唯識教学の体制を遂げるのはインド・ナーランダ大講堂において護法・戒賢大士によって、四・五世紀である。中国に伝来する歴史としては真諦三蔵、法顕三蔵、について玄奘三蔵である。

玄奘三蔵は、隋代末期世相混乱期に成都において学び、南伝系経典と北伝系経典の差異に疑網を感じて渡印を志し、ナーランダ大講堂にて戒賢大士より「護法唯識」と称される唯識思想大系の授学を受けて貞観十九年長安に還京する。

玄奘三蔵は、顕密両教経典を請来されていたが、唯識教学原典翻訳については窺基を始め、九師に訳経を企図されるが、学統の煩雑を避けるために九捨一合糅訳と呼称される如く、学派教相の整合性を求めて、窺基師に托し、法相唯識宗の宗祖は窺基（慈恩大師と称す）である。親近弟子である恵沼、智周両師の傑出した弟子を輩出し、「成唯識論述記」「成唯識論樞要」「成唯識論了義燈」「成唯識論演秘」等四類本をもって本論の主要註釈本としている。

中国においても唐代から明清時代まで唯識教学は法相系、華嚴系、天台系、真言系、浄土系、楞伽系（禅宗）と多岐にわたって教相は継承された。

日本に伝授された唯識教学は孝徳天皇白雉4年（653）遣唐船によって入唐した僧道昭が天智天皇元年（662）帰朝され、明日香元興寺東南の禅院寺に「成唯識論」十巻を納入された史事が「三代実録」に記録されている。これが「法相唯識」日本の初伝である。その後、智通、智達両師が第二伝師であり、智鳳、智鸞、智雄三師は第三伝師であり、玄昉は第四伝師（興福寺伝）である。

奈良平城京を中心に義淵（三輪）善珠（平城）賢憬（平城）平備（斑鳩）徳一（筑波）空晴（春日）蔵俊（春日）真興（飛鳥）明詮（洛東）貞慶（笠置）良遍（生駒）凝然（平城）高範（西の京）旭雅（洛中）定胤（斑鳩）泰禅（永平）等唯識学僧が連珠の如く脈々と唯識教学は伝灯している。

日本においても法相唯識教学は中国と同じ六類系に大別される教学僧と大学教授が教相を伝承している。東方学院松江分校で担当する講座は90分を四区分6時間での講義を終了するカリキュラムを組む都合上、上述のように法相唯識教学が五教態に分派している関係上、教学の根幹に基づいて枝葉條網の差異を取捨活脱した「法相五重唯識観」と題する下記の教課題目で講義をします。

- 一 捨濫留純唯識観
- 二 撰末帰本唯識観
- 三 隠劣顕勝唯識観
- 四 遣虚存実唯識観
- 五 遣相証性唯識観